

修羅の痴漢道



緒莉

声：水島☆多也 / 深泥正
玄野トモアキ

修羅の痴漢道



著：緒莉

画：水島☆多也 / 玄野トモアキ
深泥正

原作：BISHOP

CB オトナ文庫



修羅の痴漢道

プロローグ 新たなる力を得て

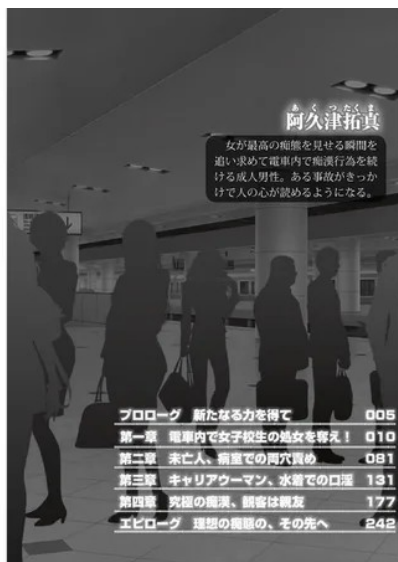
午後七時。電車は、仕事帰りのサラリーマンやOLで混み合っている。満足に身動きも取れないような混雑っぷりは、くたがれた顔をしている彼らにとってはいつもの愛憎のない日常で、それは阿久津拓真にとっても同じだった。ただ彼は、常人なら身動きすることも難しい車内を、さして何も無く動き回ることができる。そう、電車の中は、凄腕の痴漢である拓真のフィールドだった。

「んむっ……ひゅっ……」

拓真は後ろから抱き付くようにして、制服姿の女の乳房を揉まぶっている。ボリニウムと弾力のある、極上の乳房だった。

「このっ、やめなさいっ……！ うっ……手を離してっ！」

肩を吊り上げて拓真を睨み付けた。気の強そうなショートカットの女の名前は、前川由宇。鉄道警備員で、この電車が走る路線全般を監視・警戒し、日々痴漢や痴漢の抑止、防止に努めている女だ。拓真は以前、そうとは知らずオフで私服を着ていた由宇に痴漢をしてイカせたことがあり、今日は彼女に対する二度目の痴漢だった。



阿久津拓真
女が最高の痴漢を見せる瞬間を追い求めて電車内で痴漢行為を続ける成人男性。ある事故がきっかけで人の心が読めるようになる。

プロローグ	新たなる力を得て	006
第一章	電車内で女子校生の処女を奪え！	010
第二章	未亡人、痴漢での間穴責め	081
第三章	キャリアウーマン、水着での口淫	131
第四章	究極の痴漢、顧客は親友	177
エピローグ	理想の痴漢の、その先へ	242



相模原 雪穂
のんびりとしていて、優しく穏やかな雰囲気のナース。2年前に夫が交通事故で惨死し人となり、未亡人となっている。同性人気も高いが、再婚は考えていない。



久利橋 小春
礼儀正しい女子学生。昭和でやさしい笑みかけが得意。幼い頃から数学が好きで、国立理学院に足を運んでいる。成績優秀で、将来は文学系の大学へ進学を志している。



星宮 華音
総合病院の理事長を父に持ち、カネと力に見下すのが苦手。父の命令で、一般的な生活を知るために学園へは電車を使って通学している。



常磐 桐香
製菓会社に重宝のMRIをもち、実力主義なクレーンゲーム。愛想はないが、理路整然としたプロモーションとその奥に営業成績はトップクラス。

登場人物

最近のことだった。
今の拓真には、由宇の心の声がクリアに聞こえていた。能力を得てから初めてのこの瞬間で、拓真はこれまで経験したことのないほどの充実感を見ていた。どこまで触れたら由宇がどう感じるかが、手に取るようにわかる。他人の心を読む力……拓真に使えるとは思ってはいなかったが、こうも女をたやすく狂わせられるとは、予想以上だ。漠然と感じていた、拓真としての大きな壁のようなものを越えた実感があつた。
これなら、夢を叶えられるかもしれない。拓真としての「理想の形態」を見るという、大いなる夢を――



「ほら……こんなふうに満遍なく触ってやると、胸全体にいい感じが広がるだろう？」
「感じないって、言ってるでしょ……くうんっ！ あうっ……やめ、なさいよおっ！」
（なんでも……無視しようって思えば思うほど、余計……なんでもこうなるのよね……）
それは由宇の弱い責め、拓真はほぼ正確に把握することができた。由宇がどんなに鉄道職員として意識が高かろうと、圧倒的に自分が悪化する。
「どんなに否定しても、身体は正直だ……エロい声が出てるぞ」
「ひっ……」 やめて、スカートまきつちやダメえっ……！
意外に可愛らしい下着の中に手を差し入れると、ぬちゃりとした粘着質の液体が指にまとわり付いてきた。
（くうっ……またこんな……絶対捕まえてやるって思ってたのに、これじゃああの日と変わらないじゃない……恥ずかしくて、悔しくて、忘れられないあの日と……！）
「恥ずかしい記憶を掘り起こされてつかいか？ それなら何も考えられなくてやるよ、あの日お前をイカせた、この指でな……」
（ひっ、あうう！ だめ、クリ擦られたら、またイカされちゃうっ……！）
淫器に指を食い込ませた瞬間、由宇は心の中で目と口を歪めた悲鳴を上げた。
察しがいい、などという言葉では片付けられないほどの読心力を拓真が得たのは、つい

鉄道職員が拓真にイカされる……それは由宇にとって耐えがたい屈辱だったことだろう。おかげで最初の拓真以降完全に目の敵にされてしまい、しつこく追い回されてきたのだが、そんな女を再びこうして快感に溺れさせてやれると思つと、胸が膨らんだ。
「嫌そうにしているわりには抵抗が薄いな。揉まれてさっさと気持ちよくなっているんじゃないか？」
「そんなわけ、ないですよ！ 手を離せて言ってるの……」
言葉や表情は強気だが、由宇の内心は激しく動揺している。
（んんっ……胸いじられると、力抜けるっ……！ こんなやつ、すぐ捻ってやれるはずなのに……くうっ……なんでも……）
由宇の考えていることが、拓真には手に取るようにわかる。
「身体がずいぶん熱くなってきたな。拓真されて興奮してきたか」
「ひっ……んっ！ 変態っ！ 拓真されて、感じるなんて……そんな男にとつて都合のいい妄想を女に押し付けるな……」
（こいつにいいように拓真されて感じるなんて、絶対ダメ……！ こんな、揉まぶられただけで、平常心を保ってれば気にならないはず……！）
激しく感傷しているようだが、必死で快感を否定しようとしている時点ですでに、身体は快感を認めているということだ。